

コロナ禍の学生生活

— 課外活動を切り口として —



MEMBER

齋藤 勝

法政大学学生センター長、
文学部准教授

和氣 節子

神戸女学院大学学生部長、
文学部教授

岡田 龍樹

天理大学副学長、
人間学部教授

北條 英勝

武蔵野大学副学長、人間科学部教授、
私大連学生生活実態調査分科会長

音好 宏

上智大学文学部教授、
広報・情報委員会大学時報分科会分科会長

学生生活実態調査から 見えてきたこと

音 新型コロナウイルス感染症の流行により、大学でさまざまな制限が始まった2020年に大学に入学した学生もすでに在学3年目を迎え、大学生生活としての時間は後半に入っています。これまで、本誌座談会では、コロナ禍に関連して、オンライン授業、学園祭、留学、修学支援などをテーマとして取り上げてきましたが、今回は学生生活、特に課外活動をテーマに皆さまにお話をお聞かせいただきたく思います。学生生活にとって課外活動は大きなファクターの一つです。課外活動の充実、学生の学生生活に対する「満足度」にも大きく関わるほか、活動を通じて得られるつながりはもちろんのこと、学生の個性の成熟や協調性、行動力、社会性の発達の養成において重要な役割を果たします。

これまで、キャンパスでの活動に対する制限に伴い、制約が避けられない状況が続いてきましたが、社会全体で行動制限の緩和が進む中で、状況は変化しつつあります。私大連では、4年に1度「学生生活実態調査」を

実施しており、2022年10月に『私立大学学生生活白書2022』がまとめられました。まずは、この調査に関して継続的に関わっている北條先生に調査結果から見えてきたことを教えていただきたく思います。

北條 武蔵野大学副学長の北條です。私大連では、学生生活実態調査分科会の分科会長を務めており、2021年度9月から10月にかけて、第16回の「学生生活実態調査」（以下、実態調査という）を実施しました。その結果、さまざまな知見が得られましたが、中でも興味深かったのが、所属学部・学科の満足度と正課教育の満足度がコロナ禍にあっても上昇した点です。その一方、これまでも低下傾向にあった学生生活の充実度がさらに低下していました。これは、本日のテーマである課外活動と深くつながっているように思います。また、学業に関する悩みを抱える学生が増加しているという結果が得られましたが、これはオンライン授業の導入などにより、学びの継続性という点に学生の関心が集中したことが背景にあると考えられます。それに対して、友人関係の悩みは減少傾向にありました。特に、コロナ禍以降に入学した現在の2・3年生でその傾

向が顕著でした。これは、キャンパスの入構制限や課外活動の制限により、学内滞在時間が大きく低下したことが反映されているように思います。

音 神戸女学院大学では課外活動に関してさまざまな支援を行っていると聞いています。学生部長を務める和氣先生に具体的な取り組みについてお聞きしたいと思います。

和氣 2021年2月末日の緊急事態宣言解除を受



け、法人の危機管理委員会が活動基準を見直したことに応じ、3月より課外活動を、屋外↓教室↓体育館と3段階で人数や時間、回数に制限を付けて認めていきました。部独自の細かい感染対策を作成し、大学に提出してきた6団体はすぐに活動を再開させていました。

本学では、学生の課外活動を奨励することを目的として、顕著な活動や成績を収めた自治会登録団体、またはその団体に所属する個人に贈られる「大学クローバー賞」、そして同窓会組織である公益社団法人神戸女学院めぐみ会から、建学の精神にふさわしい課外活動を行っている団体に対して贈られる「めぐみ会賞」を設けています。今年は3年ぶりの対面での大学祭で、これらの表彰式を行いました。コロナ禍が続き、部員不足や今後の活動方針に悩む団体が多いのですが、そうした状況下でも諦めずに頑張ってきた団体が今年度も受賞しました。例えば、ラクロス部は朝練のみを行い、午後からは自由活動にしているそうです。部長の呼び掛けに部員が応答し、的確な判断力と自身と仲間を信じる気持ちで、新たな可能性を生み出した、ロールモデルとなる学生たちを表彰することができました。



部員の減少が与える影響

音 天理大学の岡田先生はいかががでしょうか。

岡田 本学は新型コロナウイルス感染症緊急対策本部会議を立ち上げ、課外活動を含めた活動基準を策定して対応に当たってきました。しかしながら、コロナ禍初期の2020年8月にラグビー部で集団感染が発生してメディアで報道されることとなりました。ラグビー部は全寮制であったことから、寮内で感染が拡大しました。他にも、硬式野球部、ホッケー部、柔道部の学生も寮生活を行っており、そこでの感染を防ぐため、その後も長期間対応に追われることとなりました。ただ、幸いだったのが、本学は天理教を経営母体とする大学であるため、キャンパスがある天理市内の参拝用の宿泊施設を利用できたことです。感染者、濃厚接触者、合計100名以上を寮から宿泊施設に移し、個室で隔離することができました。このように、地域と教団、大学が一体となって困難を乗り越えた結果、ラグビー部は2020年度の第57回全国大学ラグビーフットボール選手権大会で全国制覇を果たすことができました。し

かしながら、コロナ禍の収束が見えず、現在に至るまで祝賀会のような部員を祝福する機会を作れていないことを残念に思っています。

部員の増減については、体育会系ではさほどの変動はありませんでしたが、文化系は非常に厳しい状況です。学生団体を紹介するクラブオリエンテーションができなかったこともあり、部員が集まらず、活動もままならない危機的な状況が今も続いています。自治会活動についても懸念しています。コロナ禍以前に入学した現在の4年生と、コロナ禍に入学した1〜3年生が過ごしてきたキャンパスライフは、大きく異なります。通常のキャンパスライフを経験しているのは現在の4年生だけで、1〜3年生は大学祭も経験していません。今年11月、3年ぶりに対面での大学祭が開催され、自治会の学生が頑張って準備を行ったのですが、対面イベントの経験が少ない1〜3年生はどのように関わっているのか分からず、4年生がサポートに苦労したと聞いています。このように、今まで継承されてきたノウハウが途絶えてしまうという問題に対しても対策が必要だと考えています。

学生の主体的な学びと 対策への期待

齋藤 法政大学では2020年2月から理事会を中心に危機対策本部会議を立ち上げて、課外活動を含めたコロナ対策を議論してきました。課外活動は、レクリエーションという側面だけでなく、そこで築かれた友人



和氣 節子氏

関係や先輩・後輩関係がインフォーマルな形で正課授業のサポートにつながるという側面も持っています。そのため、課外活動の場はできるだけ維持していきたいという方向で意見が一致していました。しかし、緊急事態宣言が発出されたことから、新入生歓迎会も開催できず、人間関係を築けない新入生が多く出てきてしまいました。大学としてもそれに危機感を覚え、オンラインで交流イベントを実施するなどの活動を繰り返しましたが、やはり参加する学生が限定されてしまうなど、限界を感じたのも事実です。そこで、状況次第で中止になってもやむを得ないという前提で、できる限り対面でのイベント開催を実現できるように努力する方針をとりました。

その後、2020年9月に新入生歓迎会、11月には対面の大学祭も開催し、多くの学生に参加してもらうことができました。21年、22年と開催し続けてきましたが、結果的にイベントによる感染拡大は起きていません。完璧とは言わずとも、こういう対策を取れば感染を防げるということが分かってきたのです。

課外活動についても段階的に制約を緩め、2020年10月に入ってから大学祭に向けての準備や練習は基本

的に全て認めるようにしました。ただ、参加者名簿の提出、使用する部屋の制限人数の厳守や換気の徹底、また参加を強制しないことや家族の了承を得るなどの条件を課しました。2021年度までは学内の感染状況や感染対策について2週間に1度、全学に発信していましたが、本学は規模が大きいこともあり、全ての学生や団体に周知を徹底することは難しい。そのため、基本的には学生が自分たちで主体的に学び、考え、対策できるように努めてほしいというのが本学の基本姿勢です。

課外活動への参加率に表れる

コロナ禍の影響

音 各大学のリアルな現状をご報告いただきましたが、実態調査と照らし合わせて、北條先生はどのように感じましたか。

北條 部活動やサークル活動の参加率に注目すると、積極的に参加している学生の割合は28・7%と、2017年度調査と比べると14ポイント程度落ちていま



北條 英勝氏

す。また、課外活動に最初から参加していないという学生の割合が、17年度は22・2%だったのに対し、21年度では32・7%と10・5ポイント上昇しています。このことから、全体的に課外活動は低調になったということが分かります。特に、コロナ禍の始まりだった2020年度入学生、現在の3年生（回答時は2年生）ではその傾向が顕著で、通常の大学生活を1年間送ることができた



現在の4年生にはそれほど大きな影響が見られません。本学でもそうした傾向が明らかなのですが、学生支援課によると、大学祭実行委員会や自治会組織である学友会のメンバーの人数には大きな変動はないそうです。その理由を聞いたところ、両団体は大学の学生組織の中で極めて重要な位置付けにあり、大学として

も機能しないと困るため、大学のポータルサイトを使って新入生を募集するなど、かなりのバックアップをしていることが要因として考えられるということでした。そう考えると、大学側が課外活動をサポートできるところが、まだあるのではないかと思います。その一方で、齋藤先生がおっしゃるように大学が手取り足取りやってしまうと、課外活動を学生が自主的に作り出していくことの良さが損なわれてしまうのではないかと思います。という危惧もあります。

音 一時期に比べると行動制限も緩和されてきましたが、コロナ禍が完全には収まっていない状況で、今後、課外活動に対してどのような支援を行っていくべきかご意見をいただきました。ありがとうございます。

コロナ禍だからこそ 新たな“ガクチ力”

和氣 就職活動の早期化に伴い、インターンシップへの参加に対する相談件数が増えたのですが、エントリー



シートへの記入が求められる。学生時代に力を入れたこととに不安を抱く学生が多くいます。ガクチカとも略され、就職活動には切り離せないものとなっていますが、課外活動や、登録者には大学からメールで情報発信されるボランティア活動等に取り組みなかったため、そのガクチカに書ける経験がないと思ひ込み、インターシップへの参加自体をためらってしまう学生が多いことを非常に懸念しています。

しかし私は、コロナ禍によって、人と自由に会えなかった分、会って話せる時間を濃密にしようという意識を持った学生が増えたように感じています。たしかに、課外活動の制限で思うように活動できなかったかもしれないですが、だからこそ、対面で会えることが貴重なチャンスだという意識が出てきて、さまざまなディスカッションで積極的に自分の意見を伝え、人の意見を全身で傾聴し対話しようとする学生の姿が多く見られます。こうした学びの基本的な姿勢の再確認がガクチカにつながることに気付いてほしいですし、この未曾有の状況を乗り越えた経験こそが、これからを生き抜く力になっていくということを伝えていきたいです。

音 「大学時報」第401号(2021年11月号)の座談会でNHK「大学生とつくる就活応援ニュースゼミ」創刊編集長の松枝一靖さんをお招きした際、学生時代に力を入れたことを自分の言葉でうまく説明できる学生とできない学生の差が広がっているとお話ししていたことを思い出しました。それでは、岡田先生はいかがでしょうか。

岡田 本学のある奈良県天理市は人口約6万人で、本学には約3000人の学生がいます。本学は天理市と包括連携協定を結んでおり、行政とは良好な関係を築いていますが、やはり自治体や地域への配慮は欠かせません。そこで、課外活動でもこれだけの規制や対策を行っているということを報告し、自治体や市民の理解を得ながら活動を行う必要があります。

2020年に全て停止した課外活動を再開する際には、私と学生部長、校医の3人で全ての団体を回って感染防止に必要なことを説明しました。また、寮も視察して対策状況を確認しました。しかし、やはり学生が自覚して個々に対応してくれないことには、いくら大学側が注意喚起しても効果はありません。言われたこ

とをやるだけでなく、しっかり自己管理できなければ、スポーツでも勝てない。だから、日々の生活を通して、スポーツでも通用する強さを身に付けてほしい。そうした方向で、運動部員たちには自覚を促しました。

文化系の団体や自治会活動に関しては、経験のない学生たちが集まってゼロから新しいものを作り出せる可能性もあるのではないのでしょうか。これまでの活動を



見直して、型にはまらない新たな学生の活動が始まるのであれば、本学としても積極的に支援していきたいと思っています。

コロナ禍を機に起き始めた 課外活動の新陳代謝

齋藤 コロナ禍が追い打ちをかける形になりましたが、2010年代から課外活動に参加する学生の数は減少傾向にありました。なぜそうした傾向が見られるのかをまず考えなくてはならないと思うのですが、その大きな理由として就職活動が挙げられます。インターンシップは3年生から始まりますし、3年生の春学期から就職活動に取り組む学生もいる。そのため、2年生で課外活動をやめてしまう学生も多いのです。また、幹部のような責任を負う立場になりたくないという理由で早めにやめてしまう学生もいる。実際、コロナ禍では団体の幹部は感染の責任を負うという大変な立場に立たされました。そうした中で、実は大学主



齋藤 勝氏

催のイベントに参加する学生は増えているのです。その背景には、大学が責任を負ってくれるし、ただ参加して帰ればいいという気楽さがあるようです。しかし、学生の主体性を育んでいく上で、そうした在り方には不安を覚えます。

実際、コロナ禍以降、歴史のある大規模な課外活動団体がいくつか解散しました。理由を聞くと、コロナ禍

以前から運営がうまくいっておらず、すでに寿命がきていたのではないかとのことでした。その一方で昨年末あたりから、新しいサークルを作りたいという声が増えてきます。例えば、旅先でランニングをする〃旅ラン〃サークルのようなこれまでになかったサークルです。また、サッカーサークルは多数あったものの女子が参加できないところばかりだったため、女子サッカーサークルを作りたいという要望も上がっています。このように、コロナ禍を機に、課外活動の新陳代謝が起きているように思えます。これまで存続してきた団体を支援していくことも大事ですが、新しい活動を学生とともに育て上げ、今の時代にあった形を模索していくことも大切なのではないのでしょうか。

北條 実態調査では、今回、新たに「現在の心身の状況」を調査項目に入れました。そのデータを見ると、コロナ禍以降に入学した現在の2・3年生では、心身の調子が良くないという比率が高くなっています。特に、現在の3年生では、調子が悪いと答えた学生が25・9%と4分の1以上に及んでいます。これにはさまざまな理由が考えられますが、オンライン授業も大きな影響

を与えていると思います。実はオンライン授業が良い影響を与えた学生もいれば、悪い影響が目立ってしまった学生もいるのです。例えば、対人関係が苦手な学生においては、オンライン授業によって成績が向上したというケースも報告されています。対面授業が再開された中で、そうした学生にどのような影響があるのかを見極める必要があると考えています。私の印象としては、対面授業で教室に入ってきた際、あいさつをする学生が、コロナ禍以前より目に見えて増えました。対面の価値を再発見した出来事でしたが、課外活動においても、声掛けや面談を行うなど、対面であることを生かしたささいな努力で改善できる点があるのではないかと思います。

また、「不安や悩みの相談先」として、友人や先輩を挙げる学生が減少しており、一方で、家族に相談する、あるいは誰にも相談しないと回答する学生が増えています。この結果も学年との相関があり、コロナ禍前、対面状況で入学してきた学年の学生の方が、友人や先輩に相談する比率が高くなっています。こうした人間関係に対する学生の微細な変化を捉えてサポートするこ

とも、授業だけでなく、課外活動支援においても必要になると感じています。

学生の新しい挑戦を 支援していきたい

音 最後に、今後、コロナ禍が収束していく過程で、課外活動に対して大学はどのような方針を示していくべきなのか、皆さんから提言をいただきたく思います。

和氣 現在、友人とつながることができた学生と、できなかった学生に二極化するような状況が生まれていますが、その両者に大学側が対応することが必要だと考えます。孤立した学生には、欠席が多く、履修単位数が少ない傾向がありますが、そうしたサインに早く気付いて、こちらから声掛けできるように、2012年発足の学内連携システム「学生支援ネットワーク」と各学部事務室とを、より密接に、かつ合理的に協働させていくプロセスの拡充を検討しています。また、一方で仲間と新しい企画を立ち上げようとしている学生に

は、団体に所属しているかどうかにかかわらず、しっかりと学生の自主性をバックアップする。そのために本学ができることは、学生たちが次のステップを選択する際の判断材料となる正確な情報をできるだけ収集し提供することです。スチューデントファーストに重きを置いてきた本学としては、今後も学生の心に寄り添ったサポートを続けていきたいと考えています。

岡田 私は教育学を専門としていたこともあり、学外で市民活動を支援したり、地域学校協働活動を推進するなどの活動を続けてきました。コロナ禍はそうした活動にも大きな影響を与えてきましたが、注視していると活動状況が2つのパターンに分かれることに気が付きました。特に地域学校協働活動では顕著でしたが、コロナ禍を理由に活動をやめてしまう地域と、必要なことから工夫しながら頑張つて続ける地域に分かれるのです。大学の課外活動も同様で、学生がやる気を持って取り組めば継続できますが、もう大変だしいんじゃないかと思えば消えていくという状況にあるのではないのでしょうか。

先ほど、学生が新しく立ち上げる活動に期待した



音 好宏氏

いというお話がありました。が、実際、ノウハウがないと戸惑ったり、失敗したりすることもあるでしょう。しかし、そうした経験を積むのも非常に大事なことでと思います。失敗を恐れずに挑戦する学生に対して、失敗を失敗のまま終わらせないように大人がフォローし、時には失敗も良しとする。大学としてはそうした支援をしていきたいと思えます。そして、就職活動で大学時代

に何をしてきたか問われた際、失敗を糧に努力したんだと、コロナ禍があったからこそこんな活動ができたんだと胸を張って言えるような学生が増えてくることを願っています。

大学と学生が共に 守っていくべき価値

齋藤 オンライン化が新しい局面を作るという意見もありますが、やはり大学というのは人と人が出会う場であり、交わる場です。そこで、喜びが生まれることもあれば、苦しいこともあり、悩むこともあると思います。人はそうして育っていくものであり、その価値は永遠に失われないし、失ってはいけないものだと思います。それは、大学だけでなく、学生も一緒になって、みんなで守っていかなくてはならないものではないでしょうか。グローバル化が進めば、コロナ禍のようなパンデミックが再び起こる可能性があります。その時、同じことを繰り返さないように、何が失敗だったか、何が成功だったかを

しっかり整理して未来に引き継がなければいけない。自分たちの子どもが大学に入った時に同じような苦しさを味わわないために、何ができるか考えなければいけない。そのための経験として、今回のコロナ禍とどう向き合うべきかを今後も学生に問いかけていきたいと思えます。

ポストコロナに向けて 学生と向き合う

北條 実態調査の結果から、コロナ禍により、学生生活においてさまざまな側面で差が生じたり、特徴が際立ったりしてきたことが見て取れました。しかし、そのような状況下で、学生たちは前向きに生きるためにいろいろな試行錯誤や挑戦をしてきたはずです。そうした体験が学びになり、自省性が深まるなど、成長につながっていることもたくさんあるのではないのでしょうか。それに教職員がどれだけ向き合い、どこまで気付けるかが問われているように思いました。コロナ禍で、大学は非常



に大変な問題を突き付けられてきましたが、学生もまた問題を突き付けられているわけです。しかし、そうした状況は、逆に新しいものを生み出すチャンスだとも言えます。これまでの大学には、良い面も悪い面もあったはずですから、このチャンスを生かして、ポストコロナ時代の新しい大学、新しい学生生活を作っていければと思います。そのために、コロナ禍を理由にして逃げるのではなく、前向きな気持ちで、個々の学生にあらためてしっかり向き合っていくことを大切にしていきたいと思います。

音 皆さまから非常に前向きなお話をいただき、価値のある座談会になりました。先生方、本日は誠にありがとうございました。

